

## 家庭科

# 生活実践力を育む家庭科題材の開発

—「人々とのかかわり」を考え工夫する実践を通して—

デミール千代

### 1 問題の所在と研究の目的

人とのかかわりは人間が生きていくうえで必要不可欠なものである。社会の最小単位である家庭に始まり、異年齢が集まる学校生活、情報化・国際化が進み多様な人・価値観の混在する地域社会など、子どもたちは複数の社会集団に属し、生活している。一方で、現代の子どもたちにとって人とのかかわりが十分、もしくは豊かであるとは言い難い。家庭生活でさえ、社会生活の変化に伴って家族と共に過ごす時間が限定されたり、家事の機械化・社会化などによって家事参加の機会が減ったりするなど、子どもたちが量・質ともに家族と豊かにかかわり、生活経験を積む機会は減少する傾向にある。

このような課題に対し、広島大学附属三原学校園家庭科部会では、子どもに個としての自立を促しながら、家族をはじめ周りの人々とかかわっていく力、多様な社会に生きる人としても生きていくことのできる素地を育成するのは、家庭科教育の使命ととらえて、教育活動に取り組んできた。

本研究は、「人々とのかかわり」をテーマに、子どもたちがこれまでに培った知識や技能を生かすことのできる内容を組み合わせた家庭科の題材を開発し、学習における実践を日々の生活に還元してよりよい家庭生活を築いていこうとする態度を育むことを目指すとともに、その方策について考察するものである。

### 2 研究の具体的方策と検証方法

#### (1) 研究の対象

本研究で対象としたのは、本学校園第6学年2クラス75名で実施された「感謝会をひらこう」の題材であり、実施時期は平成24年10月中旬～12月上旬であった。

#### (2) 具体的方策

題材構成にあたり、題材及び実施時期を考慮し、これまでに培った知識や技能、生活経験を活用することができるよう、家庭科における、そして教科の枠を超えるが、関連した内容を組み合わせ、①個人目標の設定、②選択学習の導入という具体的方策をたてた。

##### <方策①>個人目標の設定

基盤となる題材の目的や目標を明確にし、学習の見通しをたてた後、学習後の自分像をイメージして学習における個人目標を設定する。そのことにより、子どもたちが目的の先にある自分自身の家庭生活に意識を向けることができるようにする。学習指導要領解説にて述べられているように、「児童の家庭生活の在り方、生活経験の有無などにより、児童の生活に対する興味・関心、学習意欲、思考の仕方、身に付いている知識や技能などは様々」<sup>1)</sup>であり、複数の内容を扱う題材においては、個の実態に応じた個人目標を持って学習にのぞむことで、より主体的な学びが生まれ、生活への実践意欲が促進されると考える。

##### <方策②>選択学習の導入

人々とのかかわり方として、気持ちを伝える手段には多様な方法があることに気づかせた後、具体的に実践するにあたり、学年・学級あるいは班

という集団で活動の見通しを持つための計画をたてた上で、個に応じた役割を選択・実践する。一人ひとりが役を受け持つことで責任感が生まれ、実行委員や係でなくても自分たちが学習の主演となり感謝会を作り上げた一員であるという達成感を抱くことが期待される。また選択の幅を広げておくことで、実際の生活において自分が実習したものだけでなく、実習できなかったものにまで意識を向けて取り入れていこうとする態度が育まれると考える。

表 1 本題材における学習内容項目

	内容	全員	選択
<b>A 家庭生活と家族</b>			
(1)自分の成長と家族 ア	成長の自覚	◎	
(3)家族や近隣の人々とのかかわり ア,イ	感謝の伝え方 団らの工夫	◎ ◎	
<b>B 日常の食事と調理の基礎</b>			
(1)食事の役割 イ	食事のマナー	○	
(2)栄養を考えた食事 ウ	献立づくり	●	
(3)調理の基礎 ア～オ	調理実習		○
<b>C 快適な衣服と住まい</b>			
(2)快適な住まい方 ア,イ	会場作り	●	○
(3)生活に役立つ物の製作 ア～ウ	デザイン プレゼント製作	●	○
<b>D 身近な消費生活と環境</b>			
(1)物や金銭の使い方と買物 ア,イ	買物の仕方 買物実習	● ○	
(2)環境に配慮した生活の工夫	人々とのかかわり 生活の工夫	◎ ○	

◎本題材の基盤となるかかわりに関する内容 ●既習事項

### (3) 検証の方法

方策が有効だったかどうか、子どもたちの学習や実習の様子、自由記述によるワークシートなどをもとに学習における充実感や達成感、今後の生活実践への意欲を検証することで、方策の有効性と課題を明らかにしていく。

## 3 開発した題材—第6学年「感謝会を開こう」

### (1) 題材について

小学校生活の終わりが近づくにつれて高まる成

長の実感とそれに伴う感謝という気持ちをどのように伝えることができるか、「感謝会をひらく」ことを通してその手段や工夫について考え実践するものである。感謝会で会食を取り入れることにより、相手を意識したよりよい会食のあり方について考えたり、その意義や大切さに気づいたりすることができる。さらに、会食のための献立作成や調理、プレゼント製作などにおいては、これまでに培った知識や技能、生活経験を取り入れることができる。このことは、これまでの学習を生かして自分の家庭生活や人々とのかかわりをよりよいものにしていくことができるという学びになり、実践意欲や態度を育むことができる。

### (2) 児童について

子どもたちはこれまでに自分のもの・食事・身の回りなどをよりよくすることを目的とした学習を中心に行ってきた。主体的に取り組みやすい実習だけでなく、知識・理解を深める教室型の学習においても意欲的に参加し、考えたり工夫したりしようとする姿も見られる。また、縦割り班活動における異年齢の友達や、お世話になった外部講師の方々など、さまざまな場面で手紙やプレゼントなどの交換を行ったり、教育実習生の送迎会、留学生との交流など、実行委員が中心になって計画し、開いたりする会も少なくない。一方でそれらの内容は自分たちのやりたいことが中心となってしまう、目的を見失うことも多い。

### (3) 題材の目標

- 自分の成長とそれを支えてくれた人々に関心を持ち、見通しを持って感謝会の計画や準備をすることができる。
- 料理やプレゼント、会場作りについて、感謝の気持ちの表し方や伝え方を考えたり工夫したりすることができる。
- 目的に応じた調理/製作/準備計画を立て、計画に沿って実践することができる。
- 栄養バランスのよい献立の立て方や、必要な材料の適切な選び方や買い方について理解することができる。

#### (4) 指導計画

- 第1次 オリエンテーション（1時間）
- 第2次 感謝会の計画をたてよう（2時間）
- 第3次 感謝会の準備をしよう（6時間）
- 第4次 感謝会をしよう（2時間）

「感謝会」は当該学年が「感謝と成長を表そう」をテーマに行う1泊2日の宿泊行事の中で実施する。学校行事と関連させて行うことにより、家庭科で補えない内容について学級や他教科との連携を図っていく。

#### (5) 授業の実際

##### ①時間外 感謝と成長を表そう

家庭科の学習に入る前に、両学級の時間（領域「希望（のぞみ）」<sup>2)</sup>）の中で、集団宿泊の行事「感謝と成長を表そう」の実施、及びその夕食時に学校生活を支えてくれた先生方への「感謝会をひらく」ことが決定された。

##### ②第1次 オリエンテーション

まず学習を始める前のオリエンテーションとして、学習の目的の確認や目標の設定、学習計画作りに取り組んだ。子どもの意識を、「家庭科における感謝会＝食事を作ったり、プレゼントを作ったりして楽しい時間を過ごす」ではなく、「①人々とのかかわりについて考え、その気持ちの伝え方を考えたり工夫したりすることの重要性、②気持ちを伝える手段において、調理や製作などこれまでの知識や技能、経験が活用できること」という題材を貫く基盤に気づかせた後、目標の設定、学習計画作りを行って学習の見通しを持たせた。そして、学習が終わった後どのような力がつき、何ができるようになっていたか自分の姿を想像した上で個人目標を設定させたところ、下に示したように具体性のある家庭科的な目標や日常生活一般も含む目標、具体性が感じられない目標、そして行事や学習を通しての目標などが掲げられた。具体性が感じられない目標については、個別に何をもって目標が達成できたと言えるのか話し合い、目標がより具体的になるようにした。

- ・家でも感謝会で作るような料理をいろいろな人に食べてもらう
- ・バランスを考え、おいしい料理がたくさん作れるようになる
- ・自分で材料を考えてテキパキと料理を作れる
- ・いろいろな人に感謝を伝えられる
- ・自分のことは自分でできるようになる
- ・責任や計画性をもって協力できるようになる
- ・どんな人でも協力できる
- ・時間の使い方を考えて、計画的に動ける
- ・もうすぐ中学校に行くので、一步大人になる

##### ③第2次 感謝会の計画をたてよう

感謝会を通して自分たちの気持ちをどのように表すことができるか、まず子どもたちのアイデアを共有した後、さらに「会」として具体的なイメージを持たせるために、本学校園7年生<sup>3)</sup>（中学1年生）が高齢者を招いて行った会食の様子を参考としてスライドで提示し、さらに話し合いを深めた結果、次のようなものが出た。

- ・料理を作る。  
おいしさ、見た目、栄養バランス、好み
  - ・プレゼントを作る。  
ししゅう、メッセージ
  - ・部屋や机上をきれいに飾る。  
コースター、サンキューボード、お皿の並べ方、ランチョンマット
  - ・その他  
手紙、カード、招待状、お礼を言う、歌
- 注) 下線部は、特に相手が意識された内容



図1 学級での話し合いの様子

事前アンケートでは感謝会の持ち方についてあいまいな記述しかできなかった子どもたちが、話し合いやスライドを通して、よりイメージが具体化され活発に意見を出し合うことにつながった。

また、一生懸命がんばる、協力して伝える努力をする、心から気持ちを伝える、真心をこめる、など、目に見えない心情面においても感謝を表すアプローチがあることに気づくこともできた。

次に、各学級に共通して挙げた食事・プレゼント・会場作りを大きな柱とし、会食の献立やプレゼントとなるハンカチのデザイン、会場作りの内容を班ごとに話し合った。献立の作成にあたっては、各班でルウを使用したシチュー、サラダ、ごはんまたはパン、果物の4品を準備することとし、既習事項である栄養バランス等について復習しながら、ゲストを意識した献立を話し合うことができるようにした。例えばサラダはポテトサラダ、シーザーサラダ、水菜たっぷりサラダ、カミカミサラダ（給食の人気メニュー）など、栄養バランスやゲストの好みを考慮しながら班の独創性が発揮された。このようにして感謝会の内容を具体化し班で共有した後に、当日における役割分担をグループ化（調理/製作/会場）し、個や班の実態に応じて選択させ、さらに詳しい実習計画をたてた。事前に班で大凡の内容を話し合っているため、子どもたちにとっては見通しがあるものの、品数は多いが、友だちと協力できる（調理）、一人で仕上げるため責任が大きい（製作）、調理や裁縫が苦手でも活躍の場がある（会場）など、グループによって特徴があり、その特徴を選択できるよさと一方で班での役割分担により人数の制限によって迷ったり譲り合ったりする姿も見られた。

#### ④第3次 感謝会の準備をしよう①（前日まで）

招待状の作成や買い物、計画の確認などを行った。招待状には必要な事柄だけを書くのではなく先生の好みに合わせた絵を描いたり、メッセージを添えたりするなど相手を意識した工夫が見られた。

#### ⑤時間外（図工） ランチョンマットを作ろう

切り紙をコラージュしたものにラミネートをかけ、ランチョンマットを作成した。

#### ⑥第3次 感謝会の準備をしよう②（当日、選択実習）

当日のスケジュールは以下の通りである。

14:00 全体で日程や目標の確認（司会：食事係）

14:15 調理/製作/会場班に分かれて準備

16:45 会場準備完了・料理を運ぶ

17:00 感謝会開始（司会：食事係）

17:30 感謝会終了・片付け

18:30 片付け完了

調理グループは、4～5名ずつで事前に計画した献立とレシピに基づいて約12人分の食事を作った。ゲストとなる先生だけでなく、他の活動を行っている友達の分まで作ることもあり、量の多さに責任の重さを実感しながら、意欲的に取り組んでいた。季節が冬であったこと、料理の特性上、ちょうどいい時刻に温かい食事を出すことができるよう時間を見ながらの実習となった。材料や作り方は事前の計画通りであるが、切り方や盛り付け、ドレッシングの味の調整、片づけなど、自然に協力と工夫が生まれていた。

プレゼントグループは、班の1名が無地の白いハンカチに刺繍などを施した。ゲストの名前、感謝のメッセージ、先生との思い出を絵に込めるなどのデザインは事前に計画した。当日は2時間半という限られた時間の中で、ていねいに取り組みあまり、計画していたデザインが仕上がらず、会が始まるぎりぎりまで製作に取り組んだり、刺繍を一部油性マジックなどで描いたりした。最後まで仕上げたい気持ちをゲストに伝えて後日完成させたものを渡した子どもの姿もあった。

会場グループは、招待する先生のランチョンマット作りをメインにウェルカムボード、折り紙や花紙を使った装飾など、思い思いにテーブルセッティングや会場全体の飾り付けを行った。さらに、ゲストをはじめ、みんなが気持ちよく会食をすることができるように、会場内の清掃やテー

ブルや椅子を清潔に拭くことなどにも熱心に取り組んでいた。



図2 調理グループ実習の様子

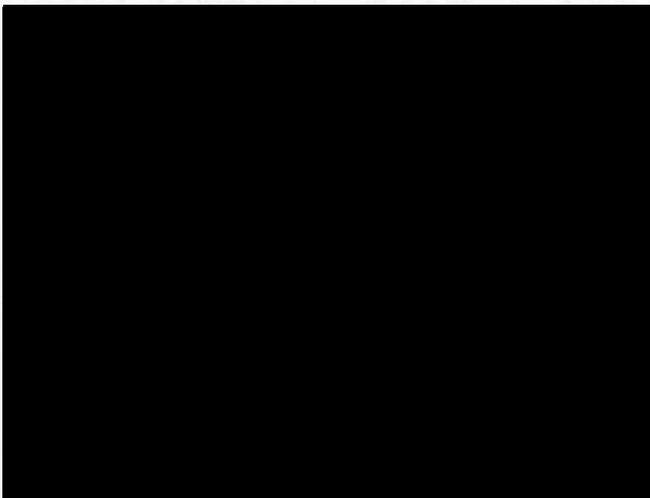


図3 左から、招待状・ランチョンマット・ハンカチ

#### ⑦第4次 感謝会をしよう

盛りつけや着席に時間がかかり、予定していた時刻より15分遅れで開始した。当初は歌や出し物という案も出されたが、限られた時間の中で楽しく有意義に過ごすためには、招待した先生たちとこれまでの思い出をふり返ったり、自分たちの思いを言葉で伝えたりしてゆっくり話をしたいという子どもたちの思いが強く、気持ちの伝え方や会食の工夫など学習が生かされた時間となった。下は感謝会後の子どもたちのふり返りである。

##### (調理)

・マヨネーズの量が難しかったので、少しずつ入れるようにして一回一回混ぜたりして、味のよいサラダができた。

・サラダを担当した。みんなすごくおいしいと言いながら食べてくれたので嬉しかった。

##### (製作)

・一生懸命作ったので感謝の気持ちがきつと届いていると思う。  
・先生に喜んでもらえるように気持ちをこめて作ることができた。ハンカチをプレゼントしたらとても喜んでくれていたのほっとした。

##### (会場)

・色合いをなるべく明るいものにしたり、花の置き場所も工夫して会場作りができた。率先して机をふいたり、物を運ぶ時にもマスクをつけるなど、自分から注意することができた。  
・いつもは時間がかかってしまう輪かざり作りが協力して作ったら早くできるうえに、会場全体に飾った時の感動がすごいと気づいた。協力して早く作るのも一つの工夫だと学んだ。

## 4 結果と考察

### (1) 方策①「個人目標の設定」について

目標が本来の家庭科から離れてしまったりあいまいであったりしたことについては、子ども自身が家庭における実生活や姿をふり返ることが不十分であったこと、行事との関連があったことなどが考えられる。

授業終了後、数日後に実施したアンケートでは個人目標に近づくことができたかという問いに対して75名中65名が目指した自分の姿に近づいたと肯定的に答えている。一方で、その理由を問うた自由記述の中では、多くの子どもが課題と合わせてこれから家庭で実践したいことを後半に記入している。

・失敗を生かして家でもう一度カレーを作ることができたら、今よりも一歩成長できると思

う。

- ・家に帰って早速「手伝うことがあったら、手伝わせて！」と両親に声をかけることができました。その上、手伝った後「ありがとう」と言ってもらえました。今後の生活に生かそうとしたら、生かすことができ、さらになりたい自分に近づきたいと思えました。
- ・学校のみんなやお母さんやお父さんには感謝の気持ちをまだ伝えられていないので、伝えてなりたい自分に近づけるように頑張っていきたい。
- ・私の目標は「学んだことを生活に生かせるようにしたい」でした。土曜日に家族のために家でみそ汁を作ったり小物入れを手作りしたりすることができました。きちんと最初に作ろうと思った通りにできました。完璧ではないけれど、少しなりたい自分に近づいたと思います。

目標の立て方を見直す必要があるが、子ども一人ひとりが目標を設定し、ふり返ることは、学習意欲の向上につながるだけでなく、目標の達成・未達成に関わらず、学習したことを日々の生活に生かそうとする態度が生まれることが検証された。

## (2) 方策②「選択学習の導入」について

班の計画が活動の見通しをもつことにつながり、より自分にあった、もしくは自分の好みに応じた実習を選択し、時間内で仕上げるという目標を持って取り組むことができたため、主体的に取り組んだり、そして計画に沿いながらも細部に工夫を凝らしたりすることができた。さらに、プレゼントを作る予定だった子どもの急な欠席にも迷うことなく他の子どもがすんなりと代役を引き受けていたこと、また、自分の担当したグループの作業が終わってスムーズに他のグループを手伝うことができたことなど、事前にお互いの活動を共通理解しておくことによる効果や影響は大きい。

一方で、プレゼントを選択した子どもは時間内に完成できない、思い通りにいかない、班で決め

たデザインに縛られて工夫し辛いなど、なんとか完成させた達成感とともに反省や不満もあり、教材の精選が必要である。

さらに「感謝会の開始時刻」というタイムリミットがある中での実習は、子どもの心理状態に少なからず焦りをもたらしした。自然に協力体制が生まれる一方で、一人の力で完成できなかったという思いを抱える子どもや、通常の調理実習ではほとんど発生しない「皿を割ってしまう」というアクシデントを2件も生む結果となった。

## 5 おわりに

「感謝会をひらこう」という題材を通して、内容項目が多岐にわたっても、目標と手段を明確にした上で子どもたちが個に応じた目標を設定したり活動を選択したりすることは、学習意欲を喚起し、そして日々の生活へ生かそうとする意欲や態度を育成することが分かった。一方で、目標のたて方、選択学習を行なう上での教材の精選、時間配分など課題も残った。子どもたちによる主体的な学びの中で達成感を味わい、そして学校知を家庭生活に還元してよりよい家庭生活を築くことのできるような題材開発にこれからも取り組んでいきたいと思う。

### <注および引用文献>

- 1) 文部科学省：「小学校学習指導要領解説 家庭編」p. 55, 2008, 東洋館出版社。
- 2) 領域「希望(のぞみ)」とは、平成24年度より文部科学省研究開発学校の指定を受けて本学校園で始まった社会的自立の基礎となる能力・態度及び価値観の体系的な育成のための自己開発型教育である。
- 3) 本学校園は幼小中一貫教育校であり、中学1年生を7年生と称している。